

岡崎市緑丘保育園（愛知県岡崎市）

自然っておもしろい、自然の営みに触れ科学する心を育もう

☆この論文の選ばれたポイント☆

幼児が自ら関心をもった素材や環境を生かし、思いの実現を実感できるように展開されています。子どもたちは自分たちにとって興味深いカイコやタンポポなどの生き物に親しみをもってかかわる経験を重ねています。そして、子どもから出た疑問を大切にされた保育者の熱心な教材研究と援助があり、子どもが自ら追求を深めることにつながっています。また、子どもたちの経験が連続性をもち、生活の中に自然に位置づけられています。

さらに、周囲の自然環境を活かして、毎年のカイコへの取り組みなど年々実践を積み重ねていること、見通しをもって子どもたちの活動に一年の季節の変化を取り入れて「科学する心」を育まれていることも評価されました。

審査委員長総評より

2006年(平成18年)度 第5回

科学する心を育てる

—— ソニー幼児教育支援プログラム ——



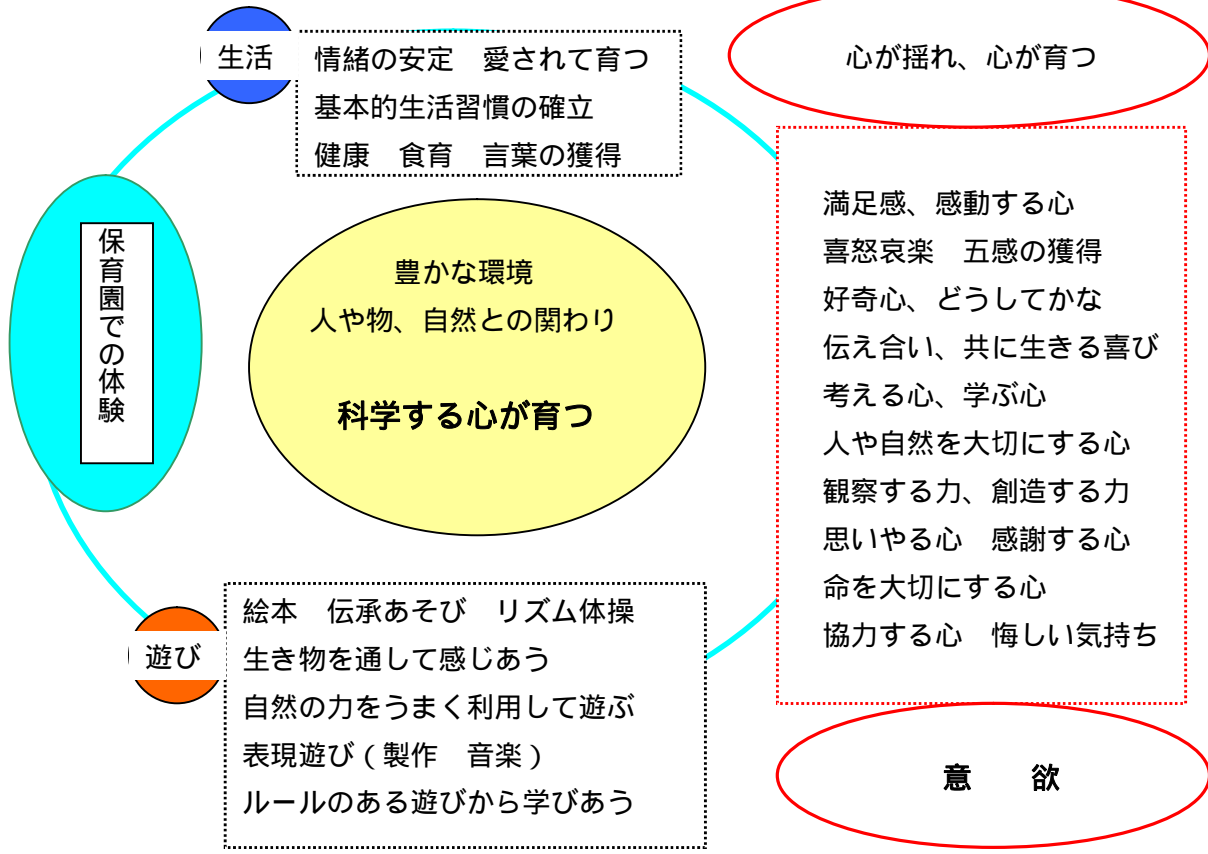
岡崎市緑丘保育園

はじめに

昨年度の取り組みの中では、一人ひとりの子どもの気持ちに寄り添いながら身近な自然と主体的に関わる様々な活動を展開し、感動を味わうことができた。幼児期の学びの芽生えに大切なものは、身体感覚であり、遊びを通して自分の体験から感じ取り、自分なりに心の中で受け止め、周りの友達や保育士と一緒に試したり話し合ったり、刺激し合って考え出していく力が豊かな感性となり、意欲を育み科学する心の育ちの基盤になっていくと考えられる。

そこで今年度は、子ども達の『自然っておもしろい』『とことんやってみたい』の意欲をありのままに受け止め、昨年までの豊かな経験を繋いでいく実践内容、恵まれた地域の自然環境を大いに利用した実践内容を通して科学する心の育ちあいを探ってみたい。

科学する心を育む構想



異年齢での生活や遊び、身近な自然の営みに触れたりする中で、子どもの心の揺れがより豊かなものになるよう環境を整えたり保育士の援助を考えている。
子どもたちの『なぜ』『やってみよう』とする意欲を引き出していく保育をいつも心掛け、子ども達の気持ちに寄り添う中で科学する心を育みたいと考えた。

Ⅲ 平成18年度 年間活動計画

月	蚕の飼育	六斗目川の発見	自然科学遊び	栽培・飼育・観察	交流	エコ	
4	<p>○蚕を各部屋で飼ってみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繭の糸取りをしよう ・二番蚕を育てよう ・桑の葉探し 地域を散歩して探そう マップを作ろう <p>○蚕の繭で卒園コサージュ作り</p>	<p>○散歩に行こう</p> <p>○春の自然に親しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンポポで遊ぼう ・綿毛を飛ばそう ・タンポポ摘みをしよう <p>○夏の自然に親しもう</p> <p>○秋の自然に親しもう</p> <p>○冬の自然に親しもう</p>	<p>○梅雨の遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雲の動きを見てみよう ・色々な雨や風の音を聞こう <p>○夏の遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・草花で色水作りをしよう ・たたき染めをしよう（浮きあがる形や模様を楽しもう） <p>○秋の遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しゃぼん玉遊び（シャボン玉で絵を描こう） ・凧あげ <p>○冬の遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よもぎ団子を作ろう ・よもぎ摘みに行こう 	<p>○種まき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アゲハの飼育観察 ○タマネギの収穫 ○イチゴの収穫 ○ナス ミニトマトの収穫 ○サツマイモ掘り ○種まきニンジン ○苗さし・タマネギ <p>○種まき</p> <ul style="list-style-type: none"> ○苗さし ○種取り ○チュウリップ球根植え 	<p>○クワガタ カブト虫 ザリガニの飼育</p> <p>○ツマグロヒョウモンの飼育観察</p> <p>○タマゴの収穫</p> <p>○ナス ミニトマトの収穫</p> <p>○サツマイモ掘り</p> <p>○種まきニンジン</p>	<p>運動会</p> <p>高年者センター</p> <p>どんぐり拾い サツマイモ掘り</p> <p>緑丘小学校 農業クラブ</p> <p>高年者センター</p> <p>慰問</p> <p>体験入学</p> <p>緑丘小学校</p>	<p>○自然体験の森へ行こう 魚の棲める川にしよう ゴミの分別 リサイクルの実践</p> <p>○おかざきエコプロジェクト（環境部）</p>
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
1							
2							
3							

蚕を育てようの取り組みのまとめ

設定した理由

毎年行っている蚕の飼育では昨年度、毛蚕から→幼虫→まゆ作り、蚕蛾→交尾→産卵の繰り返しを観察し、命の繋がりを確認する事ができた。そして、飼育の中で、糸を出す蚕に興味を持ち、絵本に書いてあった『1300メートル』という長さを「すごい長いね」という言葉から、実際の長さを確認し、長さを感じられるようにしたいと考えた。

保育士の思い

蚕を飼育していく中で、各年齢に合った発想、発見を受け止め、異年齢との繋がり、伝え合っていくことを大切にしたいと考えた。

糸取りでは、自分達の中の不思議や疑問を目で見えて確かめることで、自分のものとなっていけるようにと思い、進めていった。

蚕どんどんおおきくなるね

- ・蚕に優しく触ってみよう。
- ・桑の葉をあげよう。
- ・二番蚕まで育てよう。



桑の木マップを作るう

- ・桑の木を探してみよう。
- ・散歩で見つけたものを描いていこう。



蚕を育てよう

まゆの長さを調べてみよう

- ・まゆから糸を出してみよう。
- ・みんなでリレーをしてみよう。
- ・自分たちで糸の長さを予想して、確かめてみよう。

育ち合い、伝え合い

- ・糸取りでは、自分達で蚕の糸の長さを考え、身近な地域で予測をし、実際に自分達で糸を取りながら長さを体感できるようにする。
- ・飼育する中で異年齢との繋がりを大切にする。

地域交流

- ・散歩の中で、桑の木を探すことを通し、桑の木マップを作り、身近な地域を知ることができるようにする。

タンポポで遊ぼうの取り組みのまとめ タンポポって面白い！

設定の理由

春には登園途中で摘んだタンポポの花をプレゼントしてくれる子ども達。

身近で親しみやすいタンポポは、子ども達の遊びに様々に関わらせていくのに絶好の教材であると考えた。地域の中の自然に触れながら、子ども達と一緒に様々な挑戦をしていく中で驚きや発見に出会い、興味、関心を深めたいと思った。

保育士の思い

タンポポに関連した植物図鑑や絵本は、沢山出版されており、毎年目に触れている子ども達。しかし子ども達にとってそれらの情報は自分達の生活とは違う世界の現象と捉えられているように感じられた。それはおそらく、保育士自身が情報や知識としては積み重ねられても、実体験のないところで、深く関わる面白さを知らないことがそうさせているのではないかとも思われた。そこで、図鑑や絵本の中に出てくる様々な情報を保育士も一緒に追体験し、体で実感していく中で、学びの芽生えの育ちを期待したいと考えた。

タンポポの事を良く知ろう

- ・ タンポポの根っこって本当に長いの？ ・ ・ 根っこ掘りに挑戦しよう。
- ・ 葉っぱの形は違うの？ ・ ・ 集めて比べてみよう。

タンポポの綿毛で遊ぼう

- ・ みんなで飛ばしてみよう。
- ・ 綿毛を作ろう。



タンポポで遊ぼう



タンポポの茎で遊ぼう！

- ・ タンポポ笛吹ける？

タンポポってどんな味？

- ・ タンポポコーヒーを飲んでみよう。

育ち合い・伝え合い

- ・ 親子遠足では図鑑を用意したり、草花遊びを紹介しながら、子ども達と一緒に自然に触れて遊ぶ機会を作る。

地域交流

- ・ 六斗目川周辺の散歩を重ね、色々な草花の生息している場所を知り、それらの情報を活用してタンポポ遊びに活かす。

身近な自然で遊ぼうの取り組みのまとめ

設定した理由

園内での遊びに加えて、学区にある身近な自然に触れる機会を積極的に増やしたい。

今年度は環境部の方との関わりを多く持つ中で、ゴミへの関心や生き物へのより詳しい知識を身につけたいと考えた。

保育士の思い

自分達が住む地域の自然に触れ、川遊びなどを通して新たな発見、驚き、感動、不思議との出会い、自然への興味関心を高めたいと思った。

ゴミについて、様々なことを知る中でそれが生き物の棲みやすい環境と繋がることを知り、命の大切さに導きたいと思った。

ザリガニを飼ってみよう

- ・ザリガニの死。
- ・ザリガニ釣りをしよう。



身近な自然で遊ぼう



自然体験の森へ行こう

- ・生き物クイズ。
- ・食物連鎖って？

六斗目川を知ろう

- ・六斗目川にいる生き物に興味を持つ。
- ・生き物が棲みやすい環境って？
- ・六斗目川の源流探しに出かけよう！

めざせエコレンジャー

- ・ゴミの分別について。
- ・僕達私達にできることは。

育ちあい、伝え合い

- ・園内だけでは経験できない自然に触れる機会を作った。
- ・六斗目川にいた生き物について、他クラスの子やお家の方とも話し情報を交換する。

地域交流

- ・岡崎市自然体験の森へ行き、新たな発見、自然との出会いをした。
- ・環境部の方から生き物が棲みやすい川やゴミ問題についての話を聞く。

事例

事例1 蚕を育てようプログラム

毎年蚕の飼育を続けている当園。昔は保育園の近隣でも養蚕が盛んで、桑の木も多く手に入りやすい場所にあった。近年では道路も整備され畑も少なくなり、市街化し、住宅地に変化している。そんな環境の中で蚕を育て、昨年は毛蚕 幼虫 糸出し・まゆ作り 蚕蛾 交尾 産卵 の繰り返しを幾度も観察し、命が繋がっていることを確認し合っている。さらに今年度も体験を積み上げていく。

優しくしようね

毛蚕の誕生に、年少児は不思議そうに眺めていた。年長児は今まで年上の子と一緒に育ててきた蚕を、いよいよ自分達の手で育てる役割が回ってきたと毛蚕を前に心が揺れている。毎年飼育している蚕なので年長、年中児は「蚕だ！」と分かり「これは蚕って言うんだよ」と年少児に教えていた。蚕が第3齢月に入り、初めて見る蚕に恐る恐る触ってみる子もいれば、つまんで持ち上げたり、別の場所に持って行ってしまおう子もいた。年中児は、昨年の経験から“優しく触る”ということは分かっていたようでそっと手に乗せ、自慢気な表情で見せてくれた。年少児の様子を見て、「優しく触らないとつぶれちゃうよ」「箱の中で見ないと落ちたら誰かが踏んじゃうよ」と今までの経験で得たことや、昨年度の年長児に教えてもらったことを年少児に自分達の言葉で伝える姿から、今まで継続して飼育していたことが体得されたことを感じた。



たくさん食べて大きくなってね

もうそろそろねむりそうだね。桑の葉っぱとりに行こうよ。



どんどん大きくなっていくね

年少児は毎日蚕の様子を見るようになり少しずつ大きくなっていくことに気がつき「先生、また大きくなったね」「前は赤ちゃん指ぐらいだったのにお兄さん指ぐらいになったね」と表現を自分の指に例えている子もいた。「おなかすいてるんだね。だって葉っぱいっぱい食べてるもんね！」年中児は「パリパリ食べてる音がするね」「なんか前よりも音が大きくなったような気がするね」「うんちも大きくなったね」と桑の葉を食べている様子を興味深く見ていた。年長児は、成長の様子を定規で測り、数字を見て「前は3の所だったのもう5になったね」と大きくなったことを感じ取っていた。また「糸を出す所と葉っぱを食べる所は違うんだよ」と見つけて友達に伝えている子もいた。その後大きくなった蚕はまゆを作り、蚕蛾となり、交尾をして卵を産む。「もうすぐ赤ちゃんが生まれるよね」「そしたらまた大きくなってまゆを作るよね」とその過程もよく分かっていた。そして二番蚕まで育て、命の繋がりを目にする事ができた。

桑の葉なくなっちゃったね。どうしよう

年長児は桑の葉がなくなると足したり、毎朝箱の中の掃除をすることを自分から始めてくれた。「蚕っていっぱい食べるからすぐ無くなっちゃうね」と言うと「わたしの家に蚕の食べる葉っぱの木があるよ！」と年中児の女子が言い、その子の家から桑の葉をもらってきてその葉をあげた。いつもの散歩コースに桑の葉があることを発見した子は「六斗目川へ散歩に行った時あったよ」と教えてくれ、一緒に桑の葉を取りに行くことにした。桑の木の場所につくと「これが蚕の葉っぱだよ」「桑の葉って言うんだよね」と桑の葉という名前を知っている子もたくさんいたが、形は分かっているにもかかわらず実際の木を見たのは初めての子も多くいた。葉っぱを一枚一枚とっていくと、白い糸のような虫がたくさんついているのを見つけた。「この虫蚕が食べちゃうとお腹痛くなるよね」と友だちと話しながら虫がついている葉っぱを避けて取っていた。園に戻り、自分たちで取ってきた桑の葉を蚕にあげ、嬉しそうにじっと見ていた。

考察

蚕の飼育は毎年継続しているということもあり、年長児は知識も豊富であり、年下の子に教えている姿が見られた。昨年、年上の子に教えてもらったことや世話をすることを今度は自分達がやらなければ、という思いもあるようで積極的に世話をしてくれる子も多かった。昨年度経験した年長児、年中児が言った「やさしく触らないとつぶれちゃうよ」「葉っぱをいっぱい食べるから大きくなるんだよね」という発言を聞き、命を大切に作る心や思いやる心の育ちを感じた。その蚕が卵を産み、また新しい命が生まれてくるという過程も昨年の観察から分かっており、一つの命が次へと繋がっていく大切な命だからこそ大事にするという姿勢が見られたと感じた。

桑の木マップを作ろう

桑の木がある場所を知っているという子ども達の声を受け止め、桑の木を探すことを通し、地域の環境、自然に興味を持つことに繋がりたいと考え、保育士が桑の木マップを作ろうと提案した。道や建物などの大まかなものは保育士が描いておき、子ども達は散歩で見つけたものを描き込んでいくようにした。

保「桑の木って他にどこにあるか知ってる？」

子「緑丘小学校の近くの親子遠足で通った道にあったってお母さんが言ってたよ」

子「この前散歩で行った大きな池の所にもあったよ」

とそれぞれが覚えている場所があった。大きな地図を立てて見ながら「この辺に車屋さんがあるよね」「ここでタンポポの根っこ掘りをしたよね」「池はすごい大きかったから大きく描こうね」などと子ども達は今までの出来事や何がどの辺にあったのかを思い出しながら描き込んでいく。たんぽぽがたくさん咲いていて、根っこ掘りもした場所は“タンポポ橋”、丸太の木の細い橋には“トトロ橋”と名前もつけた。そして地図には根っこ掘りをした時の写真など実際の場所で撮ったものを貼っていき、地図の位置が分かりやすいようにした。



考察

散歩に行く度に、子ども達の得た情報や発見したことを桑の木マップに描き込んでいったことで、地域全体の様子がかめ、園周辺の自然をより身近に感じ、興味が向けられたと思われた。

まゆの糸の長さを調べてみよう

2年前、まゆから糸取りをしたことを思い出した子が「まゆって糸が出るんだよ」という話をした。蚕の絵本を見てみると、蚕のまゆは1300メートルもの長さの糸でできていると書いてあり、子ども達なりに「すごい長いね」という思いはあるものの、どれくらい長いのかというはっきりとしたイメージが持てていないように感じた。蚕が作るまゆから糸を取り、実際の長さを見て感じることをできるようになりたいと考えた。

5月19日 まゆから糸を出してみよう

年長児を対象とし、保育室前の廊下でカップラーメンのカップの横に糸穴を開け、煮たまゆを10個程入れ、それを持ちながら歩き、往復することで長さを感じられるようにしてみた。糸が出てくる様子を見ながら「細いね」「すごく長いね」「くもの糸みたいだね」とまゆから出る糸の様子を見て、口々に言いながら、ゆっくりと伸ばしていく。20メートルある廊下を10回往復したが、まだまだまゆは小さくならない。そこで2階の端から階段を降りた。「まだまだ糸が出そうだよ」と1人の子がまゆの入ったカップを持ち、ゆっくり進んでいき、他の子は糸が切れないように支える役となった。スタートした廊下まで1周することができたが、まゆはまだ残っていた。時間もだいぶかかってしまった為、1周した時点で終了とするが、まだまだ糸が残っていることを確認し、次の活動に期待が持てるようにした。



考察

煮出したまゆから糸が出てくることを初めて知った子が多く、目で見たことで「こんなに細いんだ」「蚕の口から出た糸だから細いよね」などと、蚕が口から出していた時のことを思い出している子もいた。みんなが手に持ってみたことで、糸の質感にも触れることができた。しかし、廊下を往復しただけでは長さを感じることができなかつたようであった。また、1人の子が先頭となり、糸を出していき、ほとんどの子が糸を持っているだけとなってしまい、「ぼくも糸取りやりたかった」という不満の声もあった。次の活動では子ども達が楽しんででき、より長さが実感できるようにしていきたいと思い、園庭に周囲6.6mの四角形を作り、子ども達が順番にまゆの入ったカップを手渡していき、糸を出しながらのリレーする方法をとってみた。



糸でてるよ。きれい！透明なんだね。



5月23日 みんなでリレーをしてみよう

子ども達は、全員が前回体験できなかった糸出しができ、喜んでいる様子が見られた。しかし園庭を回っていくということで、糸を体に巻きつけてしまい、切ってしまったこともあったので、切れないように子ども達も気をつけながら行っていた。細い糸をよく見ながら、カップから出る糸を確認しながら進めていく。自分の順番が来ると、転ばないように、糸が切れないように慎重に進む子、走って進む子と様々な姿が見られたが、それぞれが自分達で糸出しができたことに対して満足していた。「まだまだ続くね」と長く続いていることに喜び、どれだけ長いのかを期待して目を輝かせていた。園庭を20周およそ1300mを超えたところで糸が終わった。

考察

前回の廊下での糸取りよりも、園庭という広い場所で糸を張っている様子を見ることができ、長さというものがより感じられたのではないかと思う。また、全員が糸取りの体験ができたという部分では活動も楽しめたようで、満足した表情であった。「20回も回ったね」「長かったね」という声はあったものの、同じところを回っていることで20周という言葉や数の感覚があまり理解できていないようにも感じた。

自分たちで糸の長さを予想して確かめてみよう

園庭(1周66m)20周という前回の結果から、それぞれ保育園からどの辺までの距離が糸の長さと同じくらいなのかを予想してみる。桑の木マップを見ながら、それぞれの子が予想を立てて発表した。

保「糸をずっと伸ばしていったらどこまでいくと思う？」

子「みどり公園まで行けるよ」

子「緑丘小学校まで」などと保育園周辺の場所を言う子もいれば、「東京まで行くと思う」と言う子もいて、今までの糸取りの中で一人ひとりが感じた長さは様々であった。子ども達はそれぞれ今まで感じた糸の長さを、自分が歩いたことのある距離で考えた。『園から車屋までの赤チーム』『園から池までの黄チーム』『池からタンポポ橋のピンクチーム』『池から桑の木までの青チーム』『池から車屋までの水色チーム』の5チームに分かれた。地図にもわかりやすく、色別の毛糸でそれぞれのコースを書き込んでいき、園から出発の赤・黄チーム、池から出発のピンク・青・水色チームと2日間に分け、実際に糸を取りながら予想したコースを歩いてみることにした。



車屋さんは、過ぎたけど
まだ糸出てるね。蚕さん
頑張ってるけど、私達つ
かれちゃった。



1日目 園から出発の赤・黄チームの2チーム

カップの中から糸が出ているのをよく見て、同じチームの子5、6人が一列に並び、順番にカップを持って歩いていく。糸が絡まないように気をつけて歩いていき、曲がり角などはガムテープで道に貼り止めるようにしていく。どんどん出てくる糸に「どこまでいっちゃうのかな」などと期待しながら歩いていく。一番近い車屋に着くと、「まだまだ行けそうだね」と池までの黄チームと一緒に池を目指して進んでいく。池に着き、カップの中のまゆの様子を見てみると、まゆは少し小さくなってはいるが、まだ白いまゆが入っている。2チームとも自分達が予想したコースよりも長いことがわかり、「すごいね」「まだ歩けるよ」という声もあり、保育士が「神社まで行ってみようか」と問いかけてみると、「うん、行く!」と喜んで糸取りを続けていく。自分達の予想したコースよりはるかに長い糸の長さに、驚きながらもどんどん進み、神社に到着した。まだまだ行けそうなまゆの様子を見て、「緑丘小学校まで行けるかもしれないよ」「ちゃん家も行けそうだよ」など、残りの糸の長さを考えながら、園まで戻って行くことにした。帰り道、少しずつまゆが透けてきて、中のさなぎが見えてくると「もう少して終わりそうだよ」と言いながらもたくさんの距離を歩いた疲れが見え始めていた。そして、園に到着してもまだ少し糸が残っているのを見ると、「蚕ってすごーい!」という感動の声もたくさん聞くことができた。

2日目は池からスタートの青・ピンク・水色チームの3チーム

昨日行った友達に「すごい長かったよ」「池にも神社にも行っても大丈夫だったよ」という声を聞き、期待しながら出発していく。池までは歩いていくが、その道に前日の糸が貼ってあるのを見て、「昨日もここ通ったんだね」と糸を探しながら進んでいく。池まで着くと、順番にチームごとにスタートする。一番短く予想した池から車屋までの水色チームを先頭に糸を取りながら歩いていく。車屋の看板を目指して歩いていくが、昨日行った子の情報を聞いているので「行けそうだね」「絶対に行けるよ」と自信満々で言う子もいた。車屋に着き、スタートした池の方を見て歩いた距離を確認すると、「まゆ、すごいねー」と感心している様子であった。目的地の車屋まで来てはまだまゆが残っているのを見て、タンポポ橋までのピンクチームと一緒に、続けていく。桑の木までの青チームとは途中でコースが違うので、違う道を歩いて行くが、田んぼの向こうに桑の木も、歩いている青チームの子も見えるので、それぞれのチームが声をかけながら進めていく。青チームが桑の木に到着してもまゆは随分残っていた。そのことを確認すると大きな声で「まだ糸あるよ」と田んぼの向こうを歩いている子に報告をする。残りのタンポポ橋を目指して3チームが歩いていく。だんだん疲れも見えてきて、歩くペースが遅くなってきた子もいた。タンポポ橋が見えてくると、「あと少しだね」とゴールを目指して歩いていき、3チームともタンポポ橋まで着くことができた。タンポポ橋から池の方を見てみると、「すごい遠くまで来れたね」「こんなに長かったんだね」と改めてまゆの糸の長さを感じているようだった。そして、まだ残っているまゆを見ると、薄くなってきていたが、保育園に戻るまで糸を引き続き取りながら歩いた。水色チームは保育園に着くと、ちょうど糸が終わり、ピンク・青チームはまだ糸が残っていた。

考察

いつも散歩では前や横を向いて歩くが、カップの中の蚕を見ながら、車にも気をつけながら歩くという経験をし、神経を遣ったに違いない。またグループで代わる代わる糸の出るまゆの様子を観察してきたが、途中で嫌になりすぐにバトンタッチしてしまった子もいる中で、グループとして最後までやり遂げた気持ちは達成感を生み、協力する心、助け合い、励まし合いの心に繋がっていった。

『1300メートル』を桑の木マップから地域と重ね合わせて考えることが出来たことは、長さを自分なりに予測し、想像してみる力となり、やってみようとする意欲を育て、科学する心の育ちに繋がったのではと考える。蚕を育てる活動を通して様々な経験をし、子ども達の蚕に対するイメージがより深くなったことを感じる。



事例2 タンポポで遊ぼう

タンポポの綿毛作りをしよう

タンポポの綿毛飛ばしは、楽しい遊びのひとつであるが、タンポポの綿毛への変化の様子は、あまり観察されていない教材であった。保育士はその変化の様子を観察するなかで、変化に興味を持ち、子ども達が遊びに取り入れることを期待し、タンポポのつぼみを保育室に吊るしておくことにした。

4月25日 あれっ？さっきより綿毛になってる？

保育室に吊るしたタンポポの咲き終わりは、初めは、しぼんでおり魅力的なものではなかったのだが、戸外活動から帰ってくると出かけたときよりも綿毛が開いていることに気付いた子ども達。

子：「あれっ？さっきよりわたげになってる？」

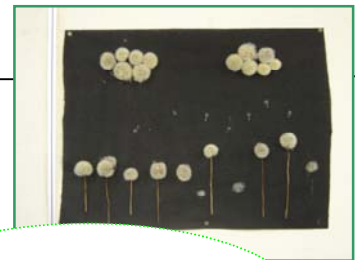
子：「ほんとだ。ちょっと大きくなってね」

一日が経ち、降園近くになると、完全に綿毛になった。子どもたちは綿毛を手で払ったり、吹いたりしては飛ばそうとしていた。

子：「綿毛は、段々できていくんだね」

保：「みんなも、花の終わったタンポポを採ってくると綿毛が出来るんだよ」

と綿毛になる前の状態を皆に見せた。降園後再び戻ってきた年中児は、とても小さなタンポポのつぼみを手に「これでしょう。縛っといて」と早速タンポポの綿毛作りに挑戦した子がでてきた。翌日綿毛になった状態を見て、クラス全体で興味が持たれ、登園時、降園時に少しずつタンポポのつぼみが集まってきた。



みんな、タンポポの綿毛で作ったよ。きれいだね。

5月9日 綿毛の赤ちゃんを摘みに行こう！

綿毛のつぼみをクラスで摘みに出かけてみる。綿毛のできる様子を見てきていたので、年少から年長まで、つぼみを採ることは困難ではなかった。特に年少児は、「綿毛の赤ちゃん」と呼ばれているつぼみを一生懸命摘んでは保育士に見せた。

年長女児：「ちゃん沢山採ってきたね」年少女児は、にっこり笑いとても嬉しそう。園に帰り早速綿毛作りの準備。年長児は年少児の摘んだ20本ほどのタンポポの赤ちゃんを全部吊るしてくれた。年少児はといえば、年長児の姿を真似て窓やドアなどに綿毛の赤ちゃんをぺたぺたと貼り、綿毛作りに挑戦であった。その光景をみていた他の年少児は、別日に出かけた散歩でまたまたどっさり綿毛の赤ちゃんを摘んできて「ぼくのもやって」と言う。綿毛は次々に開き廊下に吊るした綿毛は白いカーテンのようになった。そして、窓やドアの綿毛は・・・見事に開き、年少児の挑戦も成功となった。

考察

飛ばすことを楽しみ、親しんだ綿毛を、違った視点から眺めてみようとする取り組みは、綿毛への変化の速さから、子ども達が興味を持ちやすい教材であった。また綿毛を自分で作れることにも興味を持ち、綿毛になり易いつぼみを登降園時に自ら探してくるなど、やってみようという意欲に繋がっていった。また、花の咲き終わったものを「綿毛の赤ちゃん」と呼んだことにより、教材は年少児にとっても関わりやすくなった。散歩の途中で「綿毛の赤ちゃん見つけた!」と言って、一番沢山見つけたのも、年少児であった。それを年長児が手伝って吊るしてくれながら「 ちゃんの綿毛の赤ちゃん、綿毛になるといいね」と声をかけてもらっていた。年少児はそんな関わりが心地よくてまた「綿毛の赤ちゃん」を見つけてくるといった縦割り形態ならではの伝え合いや喜びの共感の姿が見られた。2歳児の間では、綿毛のことを「タンポポのおじいちゃん!」と表現しており、綿毛が髭のようだと感じていた。幼児と同様に、部屋に綿毛を吊るしておいたため、一瞬で飛んでいく綿毛をよく観察して、感じ取っていったのだと思われる。

5月12日親子遠足にて・・・タンポポの綿毛どこまで飛んでいくかなあ？

親子遠足は、「自然と沢山遊ぼう」をねらいとして、青年の家の広場を目的地に選んで出かけた。目的地には、タンポポが一面に咲いており、たんぽぽ、たんぽぽむーこう山へとーんでけ!ふ~!と唄いながら沢山の綿毛をみんなで一度に吹いて飛ばしっこをした。昨年風船飛ばしをした経験のある子どもたちは、風に乗って遠くに飛んでいく綿毛の行方を想像したり、たんぽぽの畔をわらべうたを歌いながら綿毛を飛ばした経験を今年に活かして遊ぶ様子が伺われた。

昔、私達もタンポポ鳴らして遊んだよね



ふー
ふー

タンポポ笛吹ける？

「タンポポ笛吹ける?」お母さんに教えてもらって、タンポポ笛に挑戦する子もいた。「太い茎がいい?」「優しく吹くといいよ」と伝え合ったり、「茎の長さで違う音が出るね」と音色の違いにも気づき、何回も失敗を繰り返しながらも挑戦していた。



5月17日 葉っぱっているんな形があるね

春の図鑑には、タンポポの葉は、色々な形があることが掲載されていた。散歩の途中で一人一枚ずつタンポポの葉を取って帰る。保育士がそれを並べて掲示する。

「大きいのがあるね」「ぎざぎざしたのがあるね」「これは細いね」「太くてまあるいね」など葉っぱを比較して話し合っていた。それからは、散歩に出かけたり、登降園の道で「綿毛の赤ちゃん」に加えて、タンポポの葉っぱも園へのお土産にする子がでてきた。

考察 園外活動を重ねてきたことに加えて、親子遠足では親子で遊ぶ中でタンポポ笛にも出会い、母親同士でも子ども時代を思い出し、タンポポ笛を鳴らしている場面もあった。保育士は遠足の道中にある草花を摘み、それらの名前を調べて掲示し、身近な自然物を通して、より春の自然に親しんでもらおうと配慮した。登園時に道で摘んだ草花を見比べて名前を言って見たり、友達との違いを探り合ったりと、今までに気付かなかったことに出会えたことで、自分から自然に関わろうとする姿が見られるようになった。

タンポポの根っこって長いね

タンポポの根っこ掘りに挑戦しよう！

子ども達と見てきた春の図鑑には、タンポポの根はとても長く、80cm~120cmくらいのものであると書いてあり、実際の写真も掲載されていた。クラスで一番長身の子が、丁度120cmだったので、「君くらいあるんだって」と伝える。

子：「そんなに長い？すご~い」と関心を示す。

保：「お散歩で、タンポポが沢山咲いてるところ知ってるでしょ？そこに行けばみんなも掘れるかもよ」

子：「へ~やってみたい、やってみたい」と口々に言っていた。そこで今まで散歩をしてきた六斗目川周辺のタンポポの群生している場所に出かけて、タンポポの根っこ掘りに挑戦していくことにした。



5月17日 さあやるぞ！

スコップを数本持って早速タンポポの根っこ掘りに挑戦する。子ども達はやる気はあるものの、「根っこを抜く」といったイメージがあり、引き抜こうとして失敗したり、関心が全く向かない子もあり、「やって見た~い」と言った子ども達の気持ちが中途半端なままで活動が終了してしまっ

考察 興味関心は持っている子ども達ではあったが、手段と方法についての知識がないことから、活動意欲が引き出せなかったのではないかと考えた。そこで、次の活動ではそれぞれの子が興味を持って関わっていけるようにするために、保育士が適切にアドバイスが出来るように掘りやすい場所の下見をし、道具を個々に用意していくことにした。また、保育士も援助するための道具を、スコップ、鎌、の2種類を準備していく。

5月25日 今度は頑張るぞ！

一人ひとりに、スコップが与えられたことで、自分の根っこを掘ろうと一生懸命な姿が見られた。

子：「先生、スコップしかないの？」

保：「鎌ならあるよ」

と見せるが、用途がわからず自分達の根っこ掘りの道具として必要とは感じなかったようである。

考察

漠然とタンポポを掘ったときと比べて、保育士が下見をして、適切に場所をアドバイスしたことにより、長い根が見つかり、子ども達の目的意識ははっきりした。そのため作業が途中になったことに対しては、又次に頑張るといった、継続して取り組もうとする見通しの立った目標が生まれてきた。保育士の配慮としては、「スコップしかないの？」という子どもの声から、作業が困難だと感じていると考え、もう少し広範囲で根の周りを柔らかくしたほうが子ども達の作業がしやすくなるのではということで、今回はスコップ、草刈鎌、備中鍬も用意していこうと話し合う。

5月30日 根っこ途中で切れちゃった。

4～5人で掘り始めた根っこは土の奥深くまで続いていた。保育士が根の周りの土を草刈鎌や備中鍬で柔らかくほぐしていくと、

子：「先生、それ何してるの？」

保：「この鍬で土を柔らかくして根っこを掘りやすくしてるんだよ。」

道具の用途に興味を持ち始めての質問も出てきた。道具の用途を理解したことにより、あちらこちらから「先生こっちも柔らかくして」と要求の声があがり、根を引っばる行為から、保育士が土を柔らかくすると、みんなで一斉に手で土を退かして根を繰り当てていく姿に変わっていった。そんな中、もう少しで根の先が見えそうなところまで掘り当てたグループの一人が、根を引っばってしまい切れてしまった。グループの誰も責めることはなかったが、子：「ぼくが引っばっちゃった、ごめんね」と謝る場面も見られた。

考察

子ども達がスコップだけでは作業が困難だと感じていたため、土を出来るだけ柔らかくする道具を用意して援助したことにより、道具の用途を理解して、自分の目的達成に利用しようとした姿が見られた。又、根が途中で切れてしまった場面では、グループの仲間に謝るなど、長い根っこ掘りを共通の目的の活動として捉えるようになったこと、根っこは自分にとっても大切だが相手にとっても大切なんだと思いやる気持ちも育ってきたと感じた。



6月2日 今度こそ！

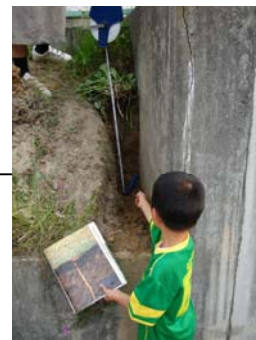
前回根っこが途中で切れてしまったため、再挑戦に意欲を燃やした子ども達であった。子：「タンポポ発見！このタンポポ根っこが長そうだよ」

保：「どうして？」子：「だって葉っぱが大きいもん」保：「ここにもタンポポがあるよ」子：「それは違うよ」保：「これタンポポじゃないの？」子：「葉っぱが違う」

タンポポを見つけることも、見分けることも、大きい根っこを持つタンポポを予測することも、とても素早くなった。

腐った葉や木の中にも大きなタンポポの葉を見つけた子ども達は、汚いとも気持ち悪いとも言わず、それを退かして積極的に掘っていく姿になっていった。このように経験を重ねながら根っこの先を切らずに上手に掘れるようになった。しかし、図鑑に載っていたような太くて長い根っこに出会うことは出来なかった。

考察 タンポポ掘りの挑戦を重ねていったことにより、タンポポを見つけることや、他の葉と見分けることや、自分達の目的に合った長い根っこを持つタンポポは、葉が大きいものなのではないかと予想をつけて行動に移すことができた。また、掘り方では、引っ張って失敗したことを友達同士で伝え合い、道具もうまく利用しながら手で優しく土を退かしていく方法を身につけていった。普段は、汚れが気になる子ども達も、腐った葉や木、じめじめした場所であっても、自分達の目的のために、自ら木や葉を退かして活動を継続させていくなど、タンポポ掘りの活動は、主体的な活動となり、困難にぶつかったらあきらめず、次に進もうとする姿が顕著になった。子ども同士の中に共通の目標や、目的を持って活動できるようになった結果だと考えられる。図鑑に掲載されていたような根には出会えなかったことに対しては、実体験を大切にしたいと考えていた活動だったので、保育士で園周辺を探してみた。結果、園の裏の土手の傾斜が、根っこ掘りに適しているのではと考え、子ども達と一緒に挑戦してみることにした。



長いねー！
先生何メー
トルくらい
あるの？

6月5日 すっごーい！長い根っこだ！

保：「高い所にあるから、ゆっくり歩くよ」「押さないでね」

子：「わかった」「ちょっと怖いなあ～」

保育士と子ども達協働の、土手での根っこ掘りの開始。子ども達は代わる代わる太い根の周辺の土を手で優しく退かしていく。

子：「引っ張っちゃあダメだよ」図鑑のような根が、顔を出し始めた。保育士は、今度こそは図鑑通りの根を見せたいと思った。緊張しながら30分程掘ると、遂に長さ60cmの太くて長い根を掘り出すことに成功した。

子：「すごいな～」「よく掘れたな」「写真みたいだ」と口々に感想を言っていた。その日の降園時には、いつもと帰り道を変えて園の裏の土手に回って長い根っこを母親に見せる子どももいた。

考察 長い期間継続して取り組んできた根っこ堀り。60cmの根を実際に掘れたことで子ども達、保育士共に感動し、意欲を生み出し、充実した活動となった。当初子ども達は、図鑑で見た長い根を自分達で掘れるとは思ってもみなかった。いつもの散歩コースにタンポポは沢山咲いていて、花摘みをしたり、草笛を吹いたり、綿毛を飛ばしたりして遊んでいるのに、タンポポの根だけは、情報としてだけ取り入れようとしていた。「みんなも掘れるかもしれないよ」の保育士の言葉に、急速に興味関心を高めていった。子ども達が、そうした心持ちに変化したのは、それまでに何度か散歩や遠足に出かけ、様々にタンポポに関わってきたベースがあったからだと思われた。おそらく「あんなに沢山タンポポが咲いているところなら、できるかもしれない」と子ども達なりに予測をし、挑戦意欲を持ったのだと考えられる。実際に活動が始まってみると、根っこ堀りは決して簡単ではなかった。それでも、子ども達は、あきらめずに「続きにする」と言っては次も頑張るって目的を達成しようという意欲を継続させていった。

「根っこ堀り？ やってみたい！」と活動を受け止め、「どうやったらうまくいくんだろう」と試行錯誤を繰り返し、「大きい葉っぱは太い根っこかも…」と考えたり、「引っぱったら駄目だよ」「土を柔らかくして」「手でそっと土を退かして」など活動から体得した手段や方法を十分に活用して友達と協力して共通の目標に向かって努力する姿へと変化していった。このように、身近な自然ととことん関わりその楽しさやすごさを実感していく経験が、主体的に関わろうとする心持ちの変化に繋がり、学ぶことの芽生えを生み出し、科学する心の芽生えが育ち合っていると考えられる。

またそれらの芽生えが育っていく背景には、子どもが感じ取ったものや目指しているものに共感し、その意欲に保育士が丁寧に向き合っただけで次の活動に繋げていくことが不可欠であるとも思われた。

6月12日 掘った根っこどうしようか？

何度も出かけて掘った根が随分沢山集まった。集まった根をどうするかを話し合う。以前に『た、たん』という絵本を見たことがある子ども達は、「タンポポコーヒーがいいんじゃない？」と言う意見が出た。『た、たん』は恥ずかしがりやの熊が森の動物にタンポポコーヒーをご馳走したいのに、なかなか誘えずにいたが、うさぎの誕生日のお祝いを機会にタンポポコーヒーをみんなに振舞うことが出来たという内容の話である。その中には、タンポポコーヒーの作り方が載っていて自分たちにも出来ると思いい、また味わってみたいと考えたのだと思われる。

『た、たん』をもう一度読み、根を細かく刻み、よく洗い2週間ほど天日干しをする。



チャイルド社の『た・たん』より



どんな味かな？

6月30日 タンポポコーヒーを飲んでみよう！

良く天日干ししたタンポポの茎を煎ると、たちまち香ばしい香りが、園中を包んだ。「タイヤキみたいな匂いだ」「ポップコーンみたいだ」と口々に言っている。その間もう一度絵本『た・たん』を見る。ミキサーで粉々になった、タンポポの根っことは、まさしく引き立てのコーヒー、煮出した色もコーヒーそのものだった。期待いっぱい飲んだコーヒーは、味もまさしく大人の味！「うへ～、あんまりおいしくない」これが子ども達の本音だった。

事例3 身近な自然で遊ぼう

「ザリガニの死・・・」(6月20日)

昨年六斗目川で捕まえたザリガニが赤ちゃんを産み、クラスで育てていたが一匹、二匹と死んでしまい、「どうして、なぜ？」から飼育ケースを変えたり、水の温度や汚さにも配慮していた。

ある朝、登園してきた子どもの一人が「先生～ザリガニが死んでる！」と叫んだ。見に行くと昨年六斗目川で捕ってきた生き物の中で、唯一生き残っていたザリガニが死んでいた。特に年長児が中心に世話をしていたので、年長児はその姿を見て「かわいそう。」「何で死んじゃったんだろう？」という声でした。そこでみんなで何で死んでしまったのかを話し合った。「水が少なかったからじゃない？」「エサがなかったからじゃない？」「お腹が痛くなっちゃったんじゃない？」「みんなが触りすぎたからじゃない？」「脱皮した時に手が折れたからじゃない？」ザリガニの本を見ながら「水草がなかったからじゃない？」「水の中にいる生き物は人間より早く死んじゃうんだよ」という子もいたり、子ども達だけでたくさんの意見が出た。「死んだら埋めてあげなきゃ」という子の声で「そうだね！」「保育園のすみっこに埋めてあげよう！」と言い、土に埋めた。「天国に行けますように」という子ども達の願いがザリガニに届いたように思う。

考察 今回のザリガニの死を通して、子ども達がどうして死んでしまったのかを話し合う中で、考える力、感じる心ができていることを感じた。自然の中で生きる宿命として、命はやがて尽きてしまうこと、その命は大切にしなければいけないことを子ども達なりに感じる事ができたと思う。



「目指せエコレンジャー！」

(ねらい：ゴミの分別の仕方を知り、自分達にできることをする。)

環境部の方より、エコプロジェクトの一つとしてゴミの分別の仕方、リサイクルについてゲームを交え、話を聞いた。

ゴミにはマークがたくさんあることを知り、お菓子の袋やペットボトル、空き缶など様々なゴミにマークがどこについているか探し、分別した。

すると...給食の時に出てくるチーズの袋を見て、「ここにマークついてる！」「このマーク僕が食べた事のあるお菓子の袋のマークと一緒にだね！」という声が聞かれたりし、子ども達から意識してマークを見るようになった。

ゴミには、人間が落とした落し物(空き缶やお菓子の袋などのゴミ)と、自然が落とした落し物(落ち葉など)があることを知る。

すると...六斗目川に入って遊んだ時に、ある男児が葉っぱを拾い「これは自然の落し物だ！」お菓子の袋を拾い「これは人間の落し物だ！」と言っていた。

ゴミをただ捨てるのではなく、分別し、リサイクルすることで、ペットボトルが服に変わったり、菓子箱などがノートに変わったりすることを知る。

町をきれいにしようという紙芝居を見る。ゴミを捨てる町が汚くなること、自分だけなら良いという思いをみんながしていたらどうなるかを知った。

すると...六斗目川周辺に散歩に出かけた時に、ゴミが落ちているのを子どもがを見つけ、「町が汚くなっちゃう」「ゴミ拾おう！」と言って、子ども達からゴミを拾う姿が見られた。

この紙芝居は、環境部の方と、保育園職員とが一緒になって作ったものである。

考察 今回のエコプロジェクトに参加し、ゴミに対する子ども達の意識が高まったように思う。参加後、散歩に出かけると以前は聞かれなかった声、ゴミが落ちているのを見ると、「町が汚くなっちゃう！」という声が聞かれるようになった。子どもに伝えるのも大切だが、まず私達大人が気をつけていかなければいけないと思った。保護者の方にもっと詳しく子ども達がどんな活動をしていたのかを伝える必要があったのではないかと課題が残った。



7月5日 自然体験の森へ行こう！

環境部の方を通じ、年長児が岡崎市の北に位置する「自然体験の森」へ行く機会を得た。保育園周辺の環境と違い、家も無く駐車場からは両側に草花を見ながら地道をひたすら歩いた。空気が違う。虫や山鳥の声が聞こえる。茅葺屋根の家の周りには薪が積んであった。環境部のお兄さんと一緒にゲームをしたり、話を聞いたりした。その話の中で、サワガニ、カエル、オタマジャクシ、ザリガニ、ちょうちよの生態や自然の中で、敵から身を守るために姿を変える生き物がいることにも気付かされた。保育園の散歩では体験できない自然の不思議さを学ぶ貴重な時間であった。



7月下旬 六斗目川で遊ぼう！

(ねらい：身近な生き物に触れ、命の大切さを学ぶ。)

川遊びに行く前に、六斗目川にはどんな生き物がいるかを話し合った。「ザリガニ！」「オタマジャクシ」「カエルもいるよ！」といった声が聞かれた。どの子も楽しみに当日を迎えた。

川に入ると初めは、どう動いてよいのか、どう生き物を捕まえるのか分からず動きが硬かった子ども達であったが、すぐに慣れ、生き生きとした表情で生き物を探し始めた。長靴に水が入り、「気持ち悪い～」と言う子もいたがそんな子もすぐに網を片手に生き物探しに夢中になった。

環境部の方に生き物の捕り方(足で草むらを踏み、網へとおびきよせる方法)を聞き、それを真似し子ども達も真剣に試していた。「やったー！ザリガニだ！」「大きいオタマジャクシ見つけた！」「カエル逃げちゃった」と生き生きとした声が飛び交っていた。子ども達が知っている生き物を見つけると、「ザリガニだ！」と元気に叫んでいたが、知らない生き物を見つけると、「これ何だ？」「気持ち悪い」「大原さんに聞いてみよう！」という声が聞かれた。サカマキ貝やヒルといった初めて目にする生き物にも出会い、子ども達の目はキラキラと輝いていた。

川遊び後環境部の方より、水質やゴミのことについて話を聞いた。「ザリガニは大変汚い水が好きなんだよ」という話を聞き、ザリガニがいるってことは「大変汚い水ってことなんだ」と水の汚れにも目がいくようになった。捕まえた生き物を持ち帰ると、死んでしまうことを聞き「お家が変わると死んじゃうね」「広い所がいいよね」などと言い、捕った生き物を川に逃してやることにした。人間が落としたゴミを食べて、鳥が死んでしまった写真を見たり、川にゴミがトラック何台分もあったということを知り、「ゴミは捨てちゃだめだよ。ゴミがあったら拾う！」という真剣な顔の子ども達の姿であった。川遊び後、散歩に出かけると道に落ちているゴミを進んで拾う姿が見られた。又、保育園の隣の公園で遊んでいると、「人間の落し物だ！」と言ってゴミを拾い始める姿も見られた。

考察 今回自分達の住む地域に流れている六斗目川の源流探しに出かけた。川に沿ってどんどん進み、約1km先の大池に辿り着いた時「うわー、すごい大きな池だ！」「僕達の町がよく見える」「六斗目川

はここから流れているんだ」と確認し合い皆で感動を味わった。子ども達の希望で桑の木マップにも加えることにした。

そんな六斗目川の不思議を知り、川に対する思いは子ども達の心の中で親しみを感じていった。川で遊んだ経験の少ない子ばかりであったが、実際に川に入り目で見て触れて体験できた。「おもしろい」「やってみよう」とする意欲は、科学する心を育む活動のひとつになったのではないかと思う。

8月中旬 ザリガニ釣りをしよう！

『ザリガニのおうさままっかちん』という絵本を読んでもと、「僕も釣りたい!」「私も釣ってみたい!」と、川に棲む生き物について子ども達の興味が盛り上がってきた。そんな様子を見て、ザリガニ釣りができるような場所を探しに散歩に出かけることにした。しかし、六斗目川、六斗目川周辺にはザリガニがいなかった。先日の大雨で川が流れ、その後の日照りで棲めなくなってしまったようだ。そこで、保育園の古いプールを利用して池を作り、その池の名を子ども達と一緒に“まっかちん池”と名付けた。他の池から手に入ったザリガニを飼育することにし、いよいよザリガニ釣りをすることに・・・

『ザリガニのおうさままっかちん』の内容にあったように、釣り竿を桑の木の枝で作り、釣りをすることにした。エサは何が良いかと子ども達に問い掛けると、ザリガニの本で調べた子が「にぼし!!」「ちくわ」と答え、エサは、にぼし、ちくわ、ソーセージの3種類を用意した。年長児を3つのグループに分け、順番に釣りに行った。1番初めに釣りを体験したきりん組では、「エサを食べてすぐにあげちゃダメなんだよね。1、2、3って数えてからだよね」と本のお話を思い出して、釣っていた。中には自分で好きなエサを選んで釣っている子もいた。どの子も「釣れた!」「私も釣れた」と全員釣ることができた。2番目、3番目のぞう組、うさぎ組では、ほとんどの子が釣れなくて子ども達の表情も暗くなっていった。「釣れないなあ」「すぐはなしちゃう」「違うエサのがいいんじゃない?」釣れることをイメージしていた子ども達は、釣れなかったことでとても残念がっていた。そこで、どうしても釣れないかを話し合った。すると、「お腹がいっぱいだったからじゃない?」「エサたくさん食べてたからだよ」「僕たちが1番にやればいいんじゃない?」「お腹のすいている時にやればいいんだよ」という意見が出た。数日後、ぞう組が1番に釣りに行った。すると、「釣れたー!」「ザリガニさんお腹すいてたんだよ!」と嬉しそうな子ども達の顔が見られた。



考察 『ざりがにのおうさままっかちん』の絵本をきっかけに、子ども達がただザリガニを飼育することだけでなく、釣ってみたいという思いが出てきた。本の内容と子ども達のイメージがとても結びつきやすく良かったと思う。ザリガニ釣りをしてみると、本の通り釣れない子もおりどうしてかを考え話し合う姿も見ることができた。ザリガニの池を作るということに、本当は自然の中でやらせてあげたいという思いがあった。しかし自然の中で生かされているザリガニは、環境によりいつもこの場に來れば捕まえるものではないことも分かり保育士側が考えさせられた結果となった。ザリガニを飼育する経験から思いやりの気持ちも育ってきているので、今後は池の中でどうしたらザリガニが棲みやすく育つかが課題になってくると思われる。子ども達にそんな言葉掛けをしながら体験を広げて行きたい。

おわりに

昨年『風と遊ぼう』の中で風船に種を付け‘花いっぱいの世界中’を目指したところ、長野県のおじいさんの他にも瀬戸市に住む小学生の女の子も拾ってくれていた。一年後、花を咲かせた写真と手紙が届いた。子ども達は、去年の感動を新たに「すごい」「うれしい」と目を真ん丸くして喜びあった。風の力に感謝し、僕達も負けないぞと毎日水やりをしている年長児のけなげな姿がありました。身近な自然を通して出会ったことのない人々との交流は、大きくなった時『夢は叶う』の希望をもたらし、心を豊かにした。今年の「科学する心を育む」実践では、蚕の糸取りを始め、タンポポの不思議や地域の六斗目川の生き物を通して身近な自然と親しみ数多くの新たな発見と感動を味わった。

子どもの意欲心情に保育士が共感し援助し、見守っていくことで‘とことんやってみよう’とする自主性がめばえ、遊びの中で友達と一緒に考え学び合う経験もできると思う。科学する心を育む保育が、今年も環境部の方の協力や地域の方の支援があって実践できたことに感謝している。



後期および次年度に向けて

- ・今年度は糸の長さを実感することができた。この経験を生かして、繭の糸取りと布作りに挑戦をする。布作りに必要な繭の量などを調べる中で、沢山の繭を作ることや、きれいな繭を作ること等の投げかけをしながら、飼育・観察を継続していく。その過程では、2番蚕、3番蚕などの飼育を経験させ、命のつながりに気付き、命を大切に育む。
- ・綿の種まきは今年は不作であったため、次年度再挑戦をし、絹糸と綿との手触り、匂い、色の違いなどを比較したり、興味を持たせていったりする。
- ・繭から出来る様々な作品を、子ども達と一緒に考えながら製作活動に取り入れていく。
- ・ちょうちょの集まる畑作りの取り組みを継続する中では、作物を全て取り除かず、残しておくことで、次の年に又再びちょうちょが集まることを年長児から年中児に伝え、期待を持たせていく。また新しい作物なども加えて知識や経験の広がりを持たせていく。
- ・ザリガニの飼育の継続を通して、その生態のより細やかな観察や、色々な図鑑をじっくりと調べたりする中から生まれてくる、疑問や要求を丁寧に受け止め、子ども達が、納得できるまで付き合い、満足感や達成感から、学びの芽生えを育てていく。
- ・幼児期に取り組める環境教育について、幼児期に伝えること、幼児期に園としてできることを再検討（六斗目川、自然体験の森、エコ活動、お年寄りとの交流など）し、引き続き環境部の方と連携をとって、地域との関わりを持たせながら活動を展開する。
- ・緑丘小学校と連携して、地域の自然と関わり一緒に遊ぶ活動を計画していく。
- ・タンポポについて遊びを深めていった体験を活かし、今後も四季折々に散歩に出かけ身近な自然に触れ、草花に親しんだり、自分達の住んでいる地域について知る。